

エマソンの家政学

エッセイ「愛」、講義「家庭」における空間表象

富塚亮平

そもそも、エマソンが代表的エッセイ群を執筆したアンテベラム期のアメリカにおいては、市場経済の発展や産業化、所有権をめぐる法の整備などを通じて、1820年代後半から用いられはじめた用語である「個人主義」の思想が、**domestic ideology** と結びつきつつ、とりわけ「所有」の側面を強調する形で広がりを見せていた。内側と外側を明確に区分する境界線が引かれたからこそ、そこには事後的に、集団から独立した個人の、見かけとは異なる内面が成立し、外部から囲い込まれた内部に存在するモノを所有する発想が生まれることとなる。たとえばアレクシス・ド・トクヴィルは、こうした公と私の峻別を前提とした個人、あるいはある価値観を共有し、一つの内側を構成するような小さなコミュニティにおける、「周囲から孤立し、引きこもろうとする」傾向にこそアメリカの特徴を見出した。この周囲から孤立し、引きこもって自らに注意を向ける、自己の「内省」を可能とした条件である、さまざまな境界線の一つとして、当時単なる比喩にとどまらない意義を有していたのが、家屋、住空間の構造に見られる変化である。

またイー・フー・トゥアンは、内省や孤立によって特徴づけられるいわゆる西洋近代的な自己像、自意識や個人主義の誕生が、私室の発生と時間的に同期していることを解き明かしている。他者のあらゆる視線や接触から逃れ、一時的にせよ自らの思考のみに注意しそれらを反芻する時空間、つまり個人空間が得られてはじめて、人は周囲の人間とは異なる「自己」のあり方を意識することができる。トゥアンは、19世紀後半以降のアメリカ家屋において各空間の分割と連結が同時に進み、それが数多くの壁やドアで囲い込まれたヴィクトリア朝家屋とは異なる、二極化した理想を同時に追い求めるような、アメリカ住宅の曖昧さと多義性を表現したことを強調する。二階の私室に加えて、一階には多くの開閉する扉で仕切られた部屋が存在したエマソン邸の空間の区切り方には、すでにこの曖昧さにつながる要素が明らかに見て取れる。

本発表は、これらの19世紀アメリカをめぐる空間論を踏まえつつ、たとえばほぼ同時代のビーチャー姉妹の持っていた感覚と興味深い対照をなしてもいる、内と外の分割を攪乱するようなエマソンの家屋、家庭に関連するレトリックに着目した。彼にとっては、一方の外部との交通を欠いた閉鎖的な空間としての家屋、他方の外部との明確な境界線を持たず、流動性を押しとどめることのできない「エジプトの荒野」や、「仮の宿に過ぎないテント」、それらはいずれも批判の対象となる。「家庭」と「街路」を他者との親密な関係性が育まれる場として特権的に扱ったエマソンは、開閉する扉を介して部分的に「家庭」が「街路」へと開かれる、そうした中間的な空間の性質に注目するなかで、流動性をめぐる特異なメタファーを生み出していった。

たとえばキャサリン・ビーチャーは、エマソンが『エッセイ第一集』を発表したのと同年の1841年に『家事要法』を出版し、そこで移民の使用人など、家庭の境界内部に住まう異質な他者の脅威を取り締まることの重要性について論じている。エイミー・カプランは、ビーチャーがトクヴィルを引きつつ無気力で病弱な母親の子どもたちを描写した記述に注意を促している。カプランも述べる通り、「間仕切り」のない内部空間は、無限に広がる荒野から身を守ると言うよりはむしろ、周囲の荒野を家庭の中に再現してしまう。そのことが、流動性を原因とする母たちの不健康へとつながるのだ。エマソンは、ビーチャーにおいては流動性と結びつけてイメージされていた使用人を家屋の内部で生活させるにあたり、彼らを恐れその恐怖を取り締まろうとするのではなく、たとえば当時の慣習を打破して彼らと食卓を共にしようとするなど、むしろ彼らを家族の成員であるかのように迎え入れようとした。しかし、無報酬の奴隷とも、金銭のみを媒介とする契約関係でつながる賃労働者とも異なる中間的な存在として使用人たちを捉えようとするこのエマソンの両義的な試みは、金銭と感情やホスピタリティを巡る主人エマソンと使用人達の問題含みの関係へと帰着する。見知らぬ他者と対等な友情の関係を築こうとする一方で、自らの立場が持つ権威性を完全に捨て去るわけでもなかったエマソンにとって、使用人との関係は、人種やジェンダー、階級を巡る矛盾が噴出する場でもあったのである。

間仕切りのないビーチャーにおける家屋とは異なり、仕切りで分割されつつもドアの開閉を通じて連結されてもいるエマソン邸内部の空間は、ビーチャーが恐れた本来は家屋の外部に属する流動性と結びつく要素を、家屋の内部にある程度引き入れるものであった。しかし、そもそもエマソンが流動性を部分的とはいえ家屋内に取り入れることができた背景には、彼が必要とあれば私的な個人空間へと引きこもり、流動性に飲み込まれない **self-reliant** な自己の輪郭を再び確立できたという背景があった。家屋内にこうした「間仕切り」を確保し、扉の開閉を「気まぐれ」から決定することができたのは、当時のアメリカにおいては、そもそも一定以上の階

級の男性（主人）に限られていた。なかでも妻やエマソンを悩ませたのは、自宅を訪ねる見知らぬ他者たちの歓待の局面であった。そうした時間においては、会話や交流を楽しむ夫エマソンのホスピタリティによって、彼女や使用人たちは疲弊させられた。客を次々と招き入れるエマソンの様子は、使用人の一人が、「この家はホテルではない」と書かれた標識を掲げると脅したことがあったほどであると言う。

この家屋とホテルを比較する視点もまた、流動性をめぐるエマソンの中間的、両義的な態度が反映された興味深いものだ。ロリ・メリッシュも強調するように(150)、ハリエット・ビーチャー・ストウはエッセイ”What is a Home?”において、家庭が「何かホテルのようではないもの、ある本物の心の生活」を提供すべき(51)であると述べ、家庭とホテルを対立的に捉えている。来客に備えた最良の部屋よりも、多少家具が痛んでいてもそれらへの愛着、感情的な家屋と住人の結びつきを重視する、家庭の閉鎖性を基盤としたストウとは対照的に、訪問者への開放性を重んじるエマソンにおいて、家屋は時に、ホテルとほとんど区別がつかないものとなる。おそらくは無自覚に妻や使用人の犠牲を強いることが前提となっていたものの、荒野やテントほど開放たれてはおらず、ビーチャー姉妹の家庭像ほどには外界から隔絶されているわけでもない、ある意味でホテルに近いエマソンにおける家庭の位置は、同時代において極めて特異なものだったことは間違いない。

この特異さを考える上で注目すべきなのが、1838年の連続講義 *Human Life* の第二回”Home”である。そこでエマソンは、いわゆる家政のさまざまな局面を、使用人たちとの関係同様に「実践的な実験」と捉えることで、その重要性に注意を促している。本講義には、休息を与える場として家庭を捉えつつも、同時に料理や掃除、日曜大工を通じて、人間のみならず家庭内のモノ、さらには住空間そのものと自己の関係性をも固定せず刷新しようとする姿勢が見出される。こうした公／私の境界を変動させるエマソン独自の感覚は、たとえば「家庭 home はひとつの家屋 house に限定されるものではない」という記述に象徴的に現れている。友情や愛が、「庭園のフェンス」や「家屋の壁」による外界との分割を必要とせず、「魂の中で聖域や家庭と化す」こと。この、外部・街路の内部・家庭化とでも称すべき事態と明白な対照をなす記述が、次の引用に見られる。

Now is he guest in Nature, a guest in his own house, a stranger to his wife and children, a stranger in his own body. He learns that he has lived in the outside of his world. A nearer intimacy has shown him how much stranger he is there. (“Home,” *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*, vol. III 32)

ここでは逆に、家屋の内部に、ビーチャーらが警戒した流動性が最大限に取り入れられている。その結果、友人たちを歓待する側にあったはずのエマソンはここで、自らが家族に対するゲスト、見知らぬ他者と化している。たしかに、家庭の日常生活に流動性を取り入れようとした彼の実験は、周囲の犠牲に支えられたものであり、必ずしも成功したわけではなかった。しかし、“Home”では、家の内部での人やモノとの関係性に加え、家屋そのものの枠組み、さらにはどのような空間を家庭と捉えるかに至るまで、あらゆる境界線を固定化から解き放ち、常に更新し直す運動の要素が、人やモノとの理想的な関係を結び直すための契機とされている。エマソンの家政をめぐる実験は、こうしたラディカルな想像力が現実の抵抗に遭う中で、可塑的な変化を繰り返す過程でもあった。開閉する扉やホテルのイメージは、同様に抵抗を受けつつも断続的に変化を繰り返すエマソンの自己観と共鳴するような空間のレトリックだったのである。

Bibliography

- Beecher, Catharine. *A Treatise on Domestic Economy; For the Use of Young Ladies at Home and at School*. T. H. Webb, 1842.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Complete Works of Ralph Waldo Emerson. Concord Edition*. Houghton, Mifflin, 1903-4.
- . *The Early Lectures of Ralph Waldo Emerson*. Ed. Stephen E. Whicher, Robert E. Spiller, and Wallace E. Williams. 3 Vols. Harvard UP, 1961.
- Kaplan, Amy. *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture*, Harvard UP, 2002.
- Matthews, Glenna. “Just a Housewife”: *The Rise and Fall of Domesticity in America*. Oxford UP, 1987.
- Merish, Lori. *Sentimental Materialism: Gender, Commodity Culture, and Nineteenth-Century American Literature*. Duke Up, 2000.
- Stowe, Harriet Beecher. *House and Home Papers*. Ticknor and Fields, 1867.
- Tocqueville, Alexis de. *Democracy in America*, vol. 2, translated by George Lawrence, edited by J.P. Mayer, Anchor-Doubleday, 1969.
- Tuan, Yi-Fu. *Segmented Worlds and Self: Group Life and Individual Consciousness*. U of Minnesota P, 1982.